レッスン：18“M”

テーマ：素質的可能性と蓋然的可能性

MAC18.DOC.MEN

私の兄弟・姉妹達、スピリット、光、火の子供達よ。

私達は常に神、絶対、神の聖性に抱かれています。

　　過去において、創造の諸世界の中、Lifeそれ自体の現れの諸世界の中、及びLifeの現象の現れの諸世界の中におけるロゴス的現れである人間、について述べてきました。

　　人間のイデアの現れであるロゴス的現れがあり、その現れには二つのタイプがあります。一つの現れはLifeそれ自体であり、それはその本質の特質を完全に表現しています；このタイプの現れは魂のセルフ・エピグノシスが表現されている存在の諸世界にあります。これら存在の諸世界は四つのヘブンであり、それらは元型、イデア、法則、原因の世界です。もう一つのタイプはLifeの現象の現れであり、この現れは制限と限界の中にあります；それは実存、二元性、必要性の諸世界であり、アウタルキー（自足状態）の世界ではありません。

　　ロゴス的現れには、その本質の結果として何があるのでしょうか？ロゴス的現れには、人間のイデアを通過する結果として、いくつかの素質的可能性が付与されており、それらの素質的可能性の中の一つはセルフ・エピグノシスと呼ばれているものです。

セルフ・エピグノシスとは、ロゴス的現れに個別性、つまり誰か他人の“私”とは異なった存在として“私は私である”と言うことができる素質的可能性を与える質なのです。

このロゴス的現れは他にも何か素質的可能性を与えていますか？勿論です。創造の諸世界において自分自身をLifeそれ自体として表現できるようになる素質的可能性、さらに、Lifeが無知の中に取り込まれていない存在の諸世界の中で、特定の現れのサイクルをスタートし、それを経験する素質的可能性が与えられています。

　　この素質的可能性のサイクルは、Lifeの現象の諸世界の中でLifeそれ自体を表現するのでしょうか？いいえ、表現しません。なぜなら、Lifeの現象においては、蓋然的可能性としてのサイクルが現れており、このサイクルが素質的可能性のサイクルの現れに制限をもたらすからです。

　　なぜ、素質的可能性のサイクルがそれ自体を表現しないのでしょうか？その理由は、Lifeとしてのインナーセルフの本質である特質が表現されていないので、現れは制限の中、境界の中、無知という境界の中にあるからです。この現れは無知の結果として、蓋然的可能性のサイクルのもとに置かれており、これらのそれぞれの現れは、蓋然的可能性というそれ自身のサイクルのもとにあります。このようなことは存在の世界においては起こりえず、存在の世界では現れは素質的可能性のサイクルの中にあります。なぜなら、存在の世界においては、誰もが同じ素質的可能性を持っているからです。

しかしながら、実存の諸世界では蓋然的可能性のサイクルのもとにあり、同じ蓋然的可能性のサイクルを経験している人は一人もいません。なぜなら、それらのサイクルは個々人の気づきのレベルによって異なるからです。それゆえ、この宇宙全体の中で同じレベルの気づきの状態にある人は一人もいないのです。

　　しかし、それでは気づき(awareness)とは何でしょうか？気づきは経験の結果としての思考・行動の仕方を示し、この宇宙において全く同じ経験を経てきている人は一人もいません。ですから、全く同じレベルの気づきと個別性の持ち主が二人いるということはありえません。

page2

　　ロゴス的存在である人間がこのような思考・行動の特定の仕方を表現できる理由は、私達がセルフ・エピグノシスとよぶ質の結果です；

その質は、個別性を獲得するために、Lifeとしての私達の微細なスパークが限界の中に取り込まれることを可能にするという素質的可能性を与えます。異なった経験は、創造の諸世界におけるLifeの現象であるこれらの各現れに“個別性”を与えるのを助けます。

　　従って、創造の諸世界には二つのサイクル、つまり素質的可能性のサイクルと蓋然的可能性のサイクルがあります。成長するに従い、素質的可能性のサイクルを通じて表現される能力をより多く現せるようになります。

　　実存の世界にいる間に、人が素質的可能性のサイクルの中の自分自身を表現しないのは、その人の責任でしょうか？そのとおりです、Lifeそれ自体から与えられたLifeの素質的可能性を表現しないのは、現在のパーソナリティーとしての人間の責任です。

そうです、いつの日か人間は、Lifeそれ自体の素質的可能性のサイクルからその人に与えられた素質的可能性の大体ほとんどを表現するようになるでしょう。しかし、全部ではありません。なぜなら、人間はLifeの現象の素質的可能性のサイクルを、転生のサイクルの中で表現しなければならないからです。人間がLifeそれ自体の素質的可能性のサイクルを表現するポイントに到達するためには、魂のセルフ・エピグノシスの完全な現れになる必要がありますが、前のレッスンで述べたように、魂の諸世界は存在の世界であり、実存の世界ではありません。

　　Lifeの現象の中で、植物界や動物界など他の王国に属する現れは何をしなければならないのでしょうか？それら（＊動植物の現れ）は何処にあり、それらは素質的可能性のサイクルあるいは蓋然的可能性のサイクルを経験するのでしょうか？それらは存在の世界、それとも実存の世界にあるのでしょうか？それらのサイクルはどうなっているのでしょうか？

　　それらには蓋然的可能性のサイクルだけがあるのでしょうか？もしそうなら、どのような蓋然的可能性のサイクルなのでしょうか？素質的可能性のサイクルもあるのでしょうか？あります。それは担当するアークエンジェル、Lifeの現象として表現されるそれらの現れを担当するアークエンジェルから与えられます。

　　実存の世界におけるLifeの現象としてのそれら（＊動植物）の現れは、それら自身の蓋然的可能性のサイクルに対して責任があるのでしょうか？それらは、それぞれそれ自身の特定の蓋然的可能性のサイクルを作りだすのでしょうか？答えはノーです。実存の諸世界におけるLifeの現象のそれらの王国は、人間の蓋然的可能性のサイクルの結果を経験しています；それらは人間、人間の現れに経験を与えるのですが、それら自身は経験を積むということはありません。それらには経験を重ねるという必要がないのです。ですから、動物や植物がそれ自身の蓋然的可能性のサイクルを経ている時、それは人間が経験するためであり、それ以外の何ものでもないのです。

さて、素質的可能性のサイクルと蓋然的可能性のサイクルの意味を明確にしましょう。ここにある植物の小さな種があります；種の中にはこの植物のサイクル全体が含まれています。もしこの種を地面に蒔き、水をやり、太陽からいくらかの熱を受ければ、種が育ち、まず小さな芽が出てきます。成長に必要な条件が与えられれば、それはその植物の標準的大きさになるまでどんどん成長し続け、何年かを経てその植物自身が今度は種を生み出すようになります。そして、その種にもまたその植物の全サイクルが含まれています。これはその特定の植物の素質的可能性のサイクルです。この素質的可能性のサイクルは、この特定の植物を担当するアークエンジェルによって与えられます。しかし、それでは蓋然的可能性のサイクルはどうなるのでしょうか？もしこの種が地面に蒔かれても、水を与えられなければそれは育ちません。もし、水が与えられても、誰かが地面を掘ってしまえば、育ちません。もし育っても、それが十分に育ちきる前に動物がその植物を食べてしまったり、火事で燃えてしまったり、その他のことが生じればその植物の素質的可能性のサイクルは断ちきられてしまいます。それらは蓋然的可能性のサイクルの現れです。これら全ての蓋然的可能性の目的は何であり、それらの経験は誰のためなのでしょうか？それはアークエンジェルのためですか？いいえ、それは人間のためです。ですから、創造の諸世界と実存の諸世界における全ての現れには、素質的可能性のサイクルと蓋然的可能性のサイクルがあることがわかります。存在の諸世界においては素質的可能性の世界だけがあり、蓋然的可能性のサイクルはありません。

page3

　　ロゴス的現れとしての人間は、経験を通じて個別性を獲得する能力を有しています。聖霊的現れについてはどうでしょうか？これらの現れにはどのサイクルが表現されるのでしょうか？私達が聖霊的現れという時、それは特定のセルフ・エピグノシスの結果としてプログラムされた全てのアークエンジェル的意識を意味します。なぜなら、アークエンジェルにはセルフ・エピグノシスという質はないからです。

　　ひとたび特定の現れを通じてスピリットが投射されると、その現れはセルフ・エピグノシスを通じてプログラムされ、そのプログラムによって創造の諸世界における特定の意識に特別な仕事が与えられます；従って、私達には様々なアークエンジェルのオーダーがあるのです。特定の仕事をするミカエルがあり、別の仕事をするガブリエルがあり…というように。私達は単に、特定の仕事だけをする特定のプログラミング内における意識を有しているのです。

　　さて、どのサイクルの中でこれらの現れは表現されるのでしょうか？それらは一つのサイクルの中だけにおいて表現され、それは素質的可能性のサイクルであり、それは聖霊的現れを通過する結果です。

　　ロゴス的現れもその中に聖霊的現れがあり、全アークエンジェルのオーダーの素質的可能性のサイクルの中にあるものは何でも、Lifeそれ自体としての人間の中にもあるのです。人間が、アークエンジェルの素質的可能性のサイクルを表現する時が将来くるでしょう。人間はLifeの現象として転生のサイクル内においてさえも、彼または彼女のアークエンジェル的ヒポスタシスを表現することができますが、アークエンジェルの本質を表現することはできません。勿論、ヒポスタシスと本質は異なっています。本質とは異なるヒポスタシスとは何を意味するのでしょうか？私達のアークエンジェル的ヒポスタシスと言うとき、それは創造の諸世界の中で現れるもの全てを意味します。本質と言う時、それは現れそれ自体の背後にある何かです。それはスピリットそれ自体から来るもので、私達は私達のスピリットの本質を表現することはできません。アークエンジェルでさえ、創造の諸世界の中ではそれを完全に表現することは不可能です。

　　そうです、**私達がいわゆる超意識的意識のセルフ・エピグノシスの現れを完成させた時**、

つまり現在のパーソナリティーの三つの体に対する支配・マスターを達成し、私達の素質的可能性の発現に近づいた時、私達のアークエンジェル的ヒポスタシスを表現することは可能です。

素質的可能性の発現は、創造の諸世界の中、そして特に実存の諸世界の中で蓋然的可能性の理想的サイクルを通じて現れます。

　　私達は神の黙想内における特定の活動のヒポスタシスについて話すことができ、この活動は特定の目的に奉仕しています。

無知の中に取り込まれることですら、特定の目的に役立っているのです。その理由は非常に重要です。

それは人間がリアリティー(Reality)について無知である間、必要なところに私達の愛(Love)を提供するためです。

　　魂のセルフ・エピグノシスとしての人間が自己実現より以前に絶対愛を表現する時、全てを、そして全ての人間を平等に…絶対存在が全てを抱きしめるのと同様に…抱きしめます。

人間が様々な異なった意味を経験することによってLifeの現象界において個別性を獲得する時、そのパーソナリティーは、同胞である全ての人間の様々な苦しみを様々な仕方で抱きしめることができます。

なぜならそのパーソナリティーはその特定の苦しみに同調し、理解することができるからです。そのパーソナリティーは転生のサイクルにある間、特定の苦しみを理解する能力を通じて、その苦しみを軽減させることができます。

なぜなら、彼または彼女は同胞の人間からその苦しみをいくらか背負うことによって、原因・結果の法則によるその結果を経験することができるからです。

　　イエス・キリストであるロゴスは、人間のイデアを通じて自分自身を現す唯一の息子です。この諸宇宙の中、全ての人間の中に住むパーソナリティーとしてのイエス・キリストであるロゴスは、世界の重荷、全人類の苦しみを背負います。

　　パーソナリティーとしてのイエス・キリストであるロゴスは、同時に全ての人間の内側にあり、経験と意味、人間が創造したものを経験します。それゆえ、最愛のお方（＊イエス・キリスト）は諸宇宙の中において全人類の苦しみを背負い、神の慈悲もまたそのお方を通じて表現されるのです。

page4

　　苦しんでいる特定のパーソナリティーに向けた愛の表現は、そのパーソナリティーがその蓋然的可能性のサイクルの結果から解放されるのを原因・結果の法則が許す、という意味ではありません。

　　愛を提供する時、私達は幼児的パーソナリティーに属する何かを提供するのでしょうか、それとも神からの愛を提供するのでしょうか？

愛として誰かに何を提供しようとも、私達はそれが私達に属すると言うことはできません。

人間が真の愛の現われに近づくにつれ、その人は現在のパーソナリティーにフォーカスしなくなり、それに魅惑されることがなくなり、他の人々が自分にフォーカスすることに魅惑を感じなくなり、それを是認しなくなります。

忍耐と理解という質は、愛のより良い理解へと導きます。私達はワークの努力を通じ、気づきの上昇にフォーカスすることによって、より良いセルフ、もっと良いセルフを表現しようと試みることができます。

ロゴスは、能力とパワーを現そうとする努力によって現すことはできず、より良いセルフ、さらにより良いセルフの表現を通じて現すことができるのです。それゆえ、私達はテクニカルな手段、あるいはいかなる形態の魔術であれ、それらを通じてパワーと能力を現わすことにフォーカスすべきではありません。無知の手、幼児性の手の中における魔術は、最終的には無知と対極に奉仕する結果になります。なぜなら、幼児的パーソナリティーの動機は、常に純粋であり続けることができないからです。

　　あなた方はしばしば、純粋性の発現、あるいはギリシャ神話で語られる多頭ドラゴンを殺すためには、黄泉の国を通過しなければならない、と人々が語るのを聞いたことがあるでしょう。そうなのです、私達が幼児性にある間は、私達はドラゴンを創造し、エレメンタルを創造し、悪魔を創造し、悪魔の軍隊を創造し、さらには神々でさえ創造します。イリュージョン（幻想）です。これらの意味の世界において、意識であるセルフ・エピグノシスの動きの結果としてひとたび個別性を獲得すれば、もはや私達はこれらの無知の世界おいていつまでも自分を表現する必要はなくなります。それを達成する方法はあるのでしょうか？あります、上昇と成長を加速する道は、知識、ガイダンス、そして懸命なワークを通じてあるのです。

　　それらに基づいた正確な評価と判断は、思考・行動の仕方としての気づきのフィルターを通じて来るでしょう。

**私達の脳にそれらの知識の波動を充電し、それによって類似した知識が通過し、表現されるようにする必要があります。**

理解とは外から何かを現わすことではなく、内側から何かを現わすことです。私達はこの英知が内側から、知識、より多くの知識、そして理解という形で表現されるようにする必要があります。

　　**私達が何かを学ぶ時に実際にしていることは、それを通過させるために、知識、さらには英知という形でエネルギーを充電しているのです。さもないと、ずっと高いレベルのエネルギーを通過させようとすると、脳が焼き切れてしまうでしょう；それゆえ、まだ学んでいない問題、あるいはまだ消化していない問題を解こうとすると、私達は弱くなり、頭痛が生じ、脳が充血し、脳を護るために最後には眠ってしまうのです。**

実際、私達は授業を通じて学習しているのではなく、むしろレッスン、知識、経験、ガイダンス、瞑想、サイコノエティカルなエクササイズその他を通じて、**脳と呼ばれるバッテリーに充電しているのです**。良いものは全て勤勉なワークを通じて得られるのであり、プレゼントとして提供されるのではありません。

　　人々は“カリスマ”のある人を話題にしますが、カリスマとはギリシャ語でギフト、贈物を意味します。カリスマ、プレゼントのようなものはありません、それは勤勉なワークの結果です。前世からのものかもしれません。しかし、私達は何かを得るためには働かねばならず、実際、私達は獲得するのではなく、それは既に内側にあるのですが、それを現していないだけなのです。ですから、それが表現されるように、十分な充電をする努力をするのです。なぜなら、私達は外側から何かを得ることは決してないからです。真理の探究者にとってこの認識が次第に現実となることでしょう、そして恐らく、Lifeの現象界においてその人が価値を置くもの、及び優先事項がそれまでとは異なった観点から計られ、見られ始めるようになるでしょう。

　私達は常に神、絶対、神の聖性に抱かれています。

EREVNA/MAC 18M./DOC 18M/END